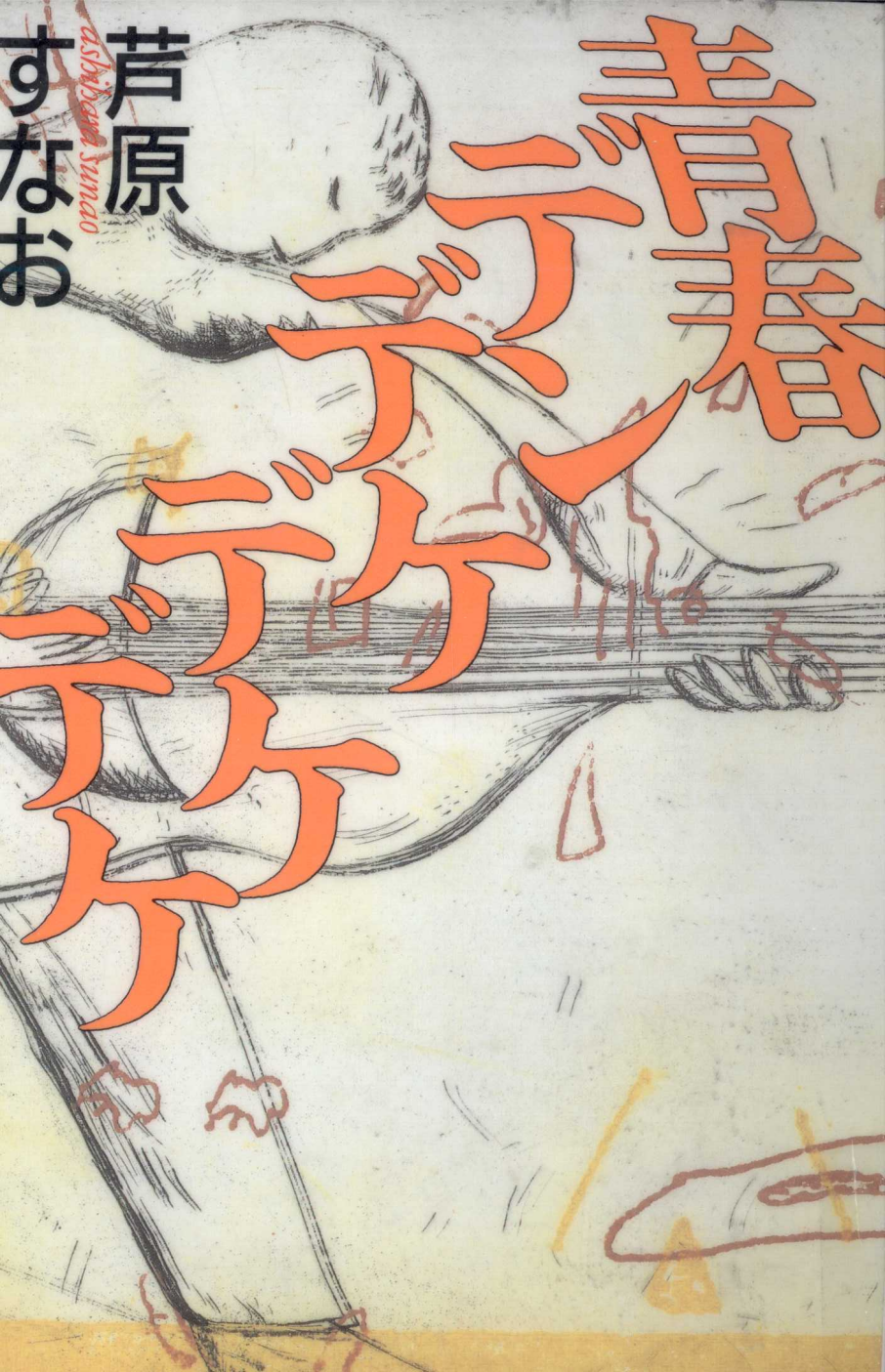
青春デンデケデケデケ

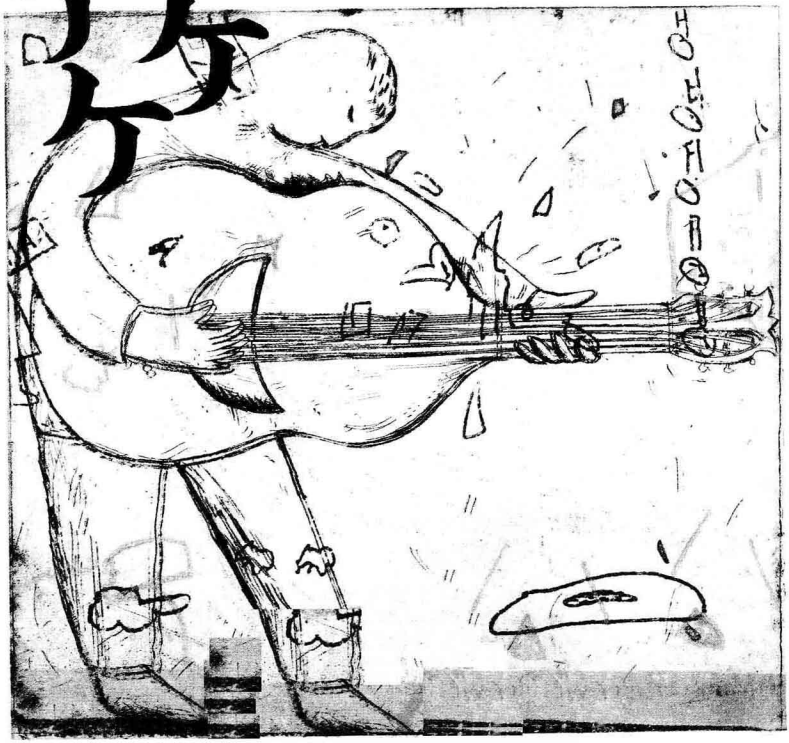
芦原すなお

ashihara sunao



青春デンデケデケデケ

原なお
Hara Naoto



河出書房新社

芦原すなお（あしはら）
一九四九年、香川県生まれ。
早稲田大学文学部卒。同大学
院博士課程中退。現在、帝京
女子短期大学講師。

青春デンデケデケデケ

一九九一年一月一六日　初版発行
一九九一年十月一五日　十九版発行

著　者　芦原すなお
装　丁　菊地信義
装　画　永畑風人
発行者　清水　勝
発行所　株式会社河出書房新社
東京都渋谷区千駄ケ谷二―三二―二
電話　三四〇四―一二〇一（営業）
　　三四〇四―八六一一（編集）
振替口座　（東京）〇―一〇八〇二
印刷　大日本印刷株式会社
製本　小高製本工業株式会社
©1991 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN 4―309―00662―0

青春デンデケデケデケ　目次

1 It's like thunder, lightnin'! 7
（雷（どんどろ）はんじゃ、稲妻じゃ！）

2 Strummin' my pain with his fingers 18
（わしの胸のせつなさをあいつはちろちろ爪弾いて）

3 Let's have a party! 29
（どんちゃかやろうで！）

4 There ain't no cure for the summertime blues! 47
（夏のしんどさ、どっちゃこっちゃならん！）

5 Girl in love, dressed in white 63
（白いべべ着た恋する乙女）

6 83

（デンデケデケデケ〜〜〜！）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

7 Stop the music, before she breaks my heart in two
（音楽やめーっ、心臓が破裂してまうが）

8 Oh, the locusts sang! *111*
（がいこ、がいこの蟬の声）

9 Goodness, gracious, great balls of fire! *133*
（ありゃ、りゃんりゃんの、ごっつい火の玉！）

10 And the band begins to play! *154*
（いよいよわしらのデビューです！）

11 What am I, what am I supposed to do? *174*
（あー、どうしょうに、どうしょうに？）

12 It's gotta be Rock'n' Roll Music! *194*
（やーっぱりロックでなけらいかん！）

13 I wish, I wish, I wish in vain *224*
（願うて詮ないことじゃけど……）

青春デンデケデケデケ

1　It's like thunder, lightnin'!

（雷はんじゃ、稲妻じゃ！）

——Eddie Floyd ;《Knock On Wood》

内径六尺はあろうかという大きなゴムのタイヤの内側に乗っかって、ぼくはやっと海辺までたどりついた。

タイヤの中でハツカネズミのように懸命に駆けてきたので息がきれた。粘土のかたまりのように手足が重かった。おまけに砂浜に入ったので、もう一回転もできない。でもいいのだ。ここから先は海だ。相手もこれ以上逃げられやしまい。

そうではなかった。ぼくのいとしい恋人をさらった黒衣の怪人は、すでに船首、船尾が三日月のように突き出した船に乗り込んで、とうに岸を離れていた。真青な海に浮かんだその船の中に、薄いブルーの絹のターバンをつけた恋人の後ろ姿が見える。

ぼくはタイヤから下りて砂浜に立ち、大声で恋人の名を呼んだ――つもりだったが声が出ない。どうやらこれは夢だな、とぼくは気づいた。

夢と判っても悲しいものは悲しい。ここで恋人と離れ離れになったら以後五十年間は会うことができないからだ。おまけにぼくはまだ彼女の顔さえ見たことがない。ぼくは泣きながら腕をふり回して地団駄を踏んだ。

恋人と怪人を乗せた三日月形の船は青い海の上をどんどん遠ざかる。やがて黒衣の怪人がぬーっと立ち上がり、かがめた身体をするすると伸ばした。馬鹿げた背の高さだ。十メートルはありそうに見える。そして、どこやらうちの仏壇の奥に掲げた阿弥陀(あみだ)さんの絵を想わせる顔に、気色の悪い笑みをにたあっと浮かべて、長い長い左の腕を軽く曲げて半月刀のように右胸の前に構えるや、草をなぎ払うように右から左にさっと打ち振った――と見るや、雲一つない青空が一瞬にして黒ビロードの緞帳の如き闇夜に変わり、それを大きなカミソリで切り裂くように稲妻が走った。

デンデケデケデケ〜〜〜！

ぼくはつむじから爪先に電気が走るのを感じてはっと目覚めた。「電気が走る」といっても別に覚醒剤とは何の関係もない。電気(エレクトリック)ギターのトレモロ・グリッサンド奏法がぼくに与えた衝撃のことを言っているのだ。机の上の棚に置いたラジオからベンチャーズの《Pipeline(パイプライン)》が流れて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

いた。心臓がそのベースに合わせて、ドッ、ドッ、ドッと高鳴っている。なぜだか股座がふぐふぐする。それはかつて全く味わったことのない強烈な感覚であった。

これは一九六五年、三月二十八日の昼下がりのことである。ぼくは十五歳。四月から近くの香川県立観音寺第一高等学校に進学することが決まっており、ほんとにのんびりと春休みを過ごしていた。

たまたま家に兄がいじっていた古いバイオリンがあったので、しばらく前からぼくは教則本や初級用のバイオリン・ピースを買ってきて独習していた。「シロジニアカク、ヒノマルソメテ」や、「ぶんぶんぶん、はちがとぶ」などの歌は一応卒業していて、そのときは《ホフマンの舟歌》にかかっていた。これは練習している本人が眠くなるような曲である。ぼくは一時間ほど微妙な音程に苦労したのち、長椅子に腰を下ろし、ひざの上にバイオリンを置いて、ラジオから流れる、ラテン・ピアニスト、ペペ・ハラミジョの《The Breeze And I》を聞くともなしに聞きながら、いつしか居眠りをしていたのだった。

ベンチャーズの《パイプライン》を聞いたのはその時が初めてというわけではなかった。当時毎週土曜日の深夜に一時間もののポピュラーソング・リクエスト番組があって、ぼくはその熱心なリスナーだった。だからベンチャーズのみならず、オリジナルのシャンティーズの《パイプライン》もすでに聞いていた。当時爆発的に人気が高まりつつあったビートルズの曲だって何曲も知っていた。

と同時にぼくは、ポップスは所詮ポップスに過ぎない、とも考えていた。音楽の本当の楽しみ

はクラシック音楽にこそ求めるべきで、ポップスは若いうちは楽しめても、大人になれば飽きてしまう。その点クラシックは八十歳になっても楽しめる。本当の芸術とはそういうものだ――なんてことを考えていたのだった。

だが、このときの「デンデケデケデケ」はきいた。きき上げた。この愚劣な俗物根性はきれいさっぱり吹き飛ばされ、頭の中を《パイプライン》がくり返し、くり返し流れていた。

なぜこのとき、《パイプライン》がかくまで強烈な印象を与えたのか、ぼく自身にもよく解らない。先述の妙な夢がもたらしたメランコリックで甘美な気分に関わりがあるのかどうか、それもよく解らない。よく解らないが、足をセメントで固められて海中に投じられたような、これはまさに取り返しのつかない体験なのだった。

「ああ、どうしょうに！」と、ぼくは切ないためいきとともにつぶやいた。

ぼくは半ば無意識的にバイオリンを取って《パイプライン》のメロディーをなぞろうとしたが、うまくいかなかった。

次にバイオリンをウクレレのように抱えて、G弦を親指の腹でトレモロした。

ポンポコポコポコ……

バイオリンを敷きっぱなしの布団の上に放り出してぼくは叫んだ。

「やっぱり電気ギターでないといかん！」

まさにこれは電気的啓示なのであった。

ぼくの名は藤原竹良という。父が「竹のようにまっすぐのびるのが良い」ということでつけた名だが、ぼくはあまり好きでない。センスがない。親しい友人は「ちっくん」と呼ぶ。

さて、デンデケデケデケの啓示を受けてロックの道を志し、晴れて高校一年生となったちっくんだが、なにはともあれ、ギターとアンプを手に入れなければならない。楽器なしでは話にならない。

ジョー・コッカーという歌手はテニスのラケットでギターと歌の練習をしたそうだけど、この当時は彼のことは知らなかった。知っていたとしても、ぼくはラケットも持っていなかったのでどうしようもない。

現在の高校生ならさっさとアルバイトでもして欲しいものを買うのだろうが、当時のぼくのような田舎の町の高校生だと、アルバイトをするのもなかなか大変なのである。

第一、仕事がない。マクドナルドも、ミスター・ドーナッツも、ぼくの町にはなかった（今もない）。あるのはうどん屋とお好み焼き屋くらいで、そういった店はたいていおっさんかおばはんが切り盛りしている。坊主刈りの男子高校生のアルバイトなど見たことがない。いたとしても、みんな「あれ、なんじゃろ？　きちゃなー」と思うだろう。ぼくだって思う。

また、親も学校の先生も、高校生がアルバイトをするのを快く思っていない。ぼくの入った高校は至極のんびりしていたが、いちおう進学校で、相談を持ちかけたところで答はどうせきまっ

ている。

——そなな暇があったらこじゃんと（しっかりと）勉強せんか、あほたれ！

そして当時のぼくの小遣いは月々二千円と定められていて、貯金など全然ありゃしなかった。結局、夏、冬、あるいは春の長期の休みに、なんとしても口を見つけて、（先生と親を丸め込んで）アルバイトするしかなさそうである。啓示をお垂れ下さった電気の神様には悪いけど、しばらくはどうにも動きがとれそうにない。啓示だけじゃなくて、ついでにお金も垂れてくれりゃよかったのに、とぼくは思った。

その代わり、と言っちゃなんだけど、ぼくは髪を伸ばし始めた。ロック・ミュージシャンが坊主刈りでは様にならん、と思ったからだ。

そういうぼくの頭を見て担任の臼田先生が、毎朝ホームルームで出席を取るたびにこう言う。

「こら、藤原よ、お前はどこのへんど（こじき）の子ぉぞ？」

始めのうちはこのつまらない冗談につきあって、「有明（あんりゃけ）のへんどの子ぉです」とぼくは答えていたが、そのうち馬鹿々々しくなって何とも答えなくなった。（「有明」というのはぼくの住んでいた海辺の地区の名称である。この町、すなわち観音寺では、ルビで示した如く、「あんりゃけ」と発音する人が多い。観音寺の方も、正式には「かんのんじ」ではなくて「かんおんじ」だが、実際には「かおんじ」と発音する人も少なくない。）

また、英文法の寺内先生は、教室を歩き回って授業するのだが、横を通るたびにぼくのうなじの毛を軽くひっぱる。野道を行く人が何の気なく草の葉をちぎる、といった感じだ。別にそうや

って注意しているつもりでもないらしい。

「――ちゅう具合にの、仮定法いうんはぁ、ウソのことなんぞ。きゅっ（↑毛をひっぱる音）。ほんでからにぃ（それで）、わがの（じぶんの）目ぇでこじゃんと見たホンマのことはぁ、直説法で言うのんがぁ、おまえ、英語の文法じゃがい」と言って寺内先生は教壇に戻り、黒板の左から右いっぱいを使って、

「仮定法＝ウソ、直説法＝ホンマ」と大書した。

寺内先生の授業は解りやすいというので生徒の間で評判がよかった。たしかに解りやすいに違いないが、その解りやすさは、細かいことや例外やなんかをきれいさっぱりぶっとばす益荒男ぶりの上に成立している解りやすさなのであった。

ヒゲや髪を伸ばす途中というのは見苦しいものだ。近頃ではお相撲の新弟子の中には、マゲが結えるようになるまで髪にパーマをかけたりする者もいるらしい。自分でも見苦しいと思うからなんだろう。しかし当時のぼくはちっともそう思わなかった。前髪が伸びてひっぱれば眉に届くようになると、もう嬉しくて、一日に何度鏡を見ても飽きなかった。鏡を見ながら右を向いたり、左を向いたり、うふふと笑ってみたり、顔をしかめたり。風呂で髪を洗った折も、髪をぴったりなでつけてみたり、むく犬よろしく、ぶるぶる頭をふるわせて水気をきった後に、じっと鏡をのぞき込んだり……。いや、娘さんだけではない、息子さんだって憑かれたように鏡を見る時期があるのだ。

これほど毛のことが気になったのは、陰毛が生え始めた頃以来のことだ。御婦人方は知るまい

が、陰毛の生えかけた少年のざっと七十パーセントは、マッチ棒で一本一本押さえながら、嬉しそうに毎日陰毛の数を数えるのである。

「お父ちゃんなあ」と、母が夕食時に父に向かって言った。「竹良っちゃ、こないに（近頃）色気づいてしもて、しょんが（しようが）ないんどな」

ぼくはぎょっとして顔面に血がのぼるのを覚えた。

「ほうや。どしてや」というのが、そら豆の皮をぷっとお菜皿の横に吐き出して後の父の返事。

「毛ェ伸ばしだしてから、一口中鏡見よらい」と母。

「ほうや。ふふふ」と父。

ぼくは、自分が鏡を見るのは「色気づい」たためではなくて、もっと高邁な目的のためなのだ、と抗弁しようと思ったが、できなかった。頭に血がのぼっていたし、母の言うことにも確かに真実が含まれていることを否定できなかったし、なにより、このころぼくは家ではほとんど口をきかなかったからである。別に家庭内がぎくしゃくしてたというのではない。この年頃の日本の男の子はだいたいそんなもんだろう。

当時飽きずに眺めたものが頭髪以外にもあった。それは、学校近くの商店街にある、「神戸屋」という洋菓子屋みたいな名前の楽器店のショウ・ウィンドウだった。

ウィンドウの奥の壁には、電気ギターが三本、荷作り用のひもで首吊りみたいな恰好にぶら下げてあり、その下にはアンプが二台置いてあった。ギターのうちの一本はテスコ社製のもので、残りの二本はグヤトーン社のものだった。いずれにもぴかぴか銀色に光り輝くトレモロ・アーム

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.